

地域で信頼される医師を育てる大学病院であるために

〈若手医師の臨床トレーニングはこう行われる〉

ドクターまでの道のり

旅行中の飛行機内。「急病の方がいらっしやいます。乗客の皆様の中に、医師や看護師の方はいらっしやいますか？」とキャビンアテンダントからのアナウンス。そこにさっそうと主人公の医師が現れて、患者の病状を判断して的確な応急処置を施し、無事到着地の病院に引き継いだ・・・。

私は医師になって20年余りが過ぎましたが、幸か不幸か？このドラマのような場面に遭遇したことはありません。しかし、ドラマのスーパードクターのようにはいかないまでも、目の前に具合の悪い方がいれば、自分の知識と経験を生かして初期対応を行おうと心の準備はしています。医師には数々の専門分野があり、それぞれの得意分野は異なりますが、緊急の場面で最低限の処置を行える気概と技量を持つてほしい・・・多くの皆様が期待されることではないかと思えます。

そもそも医師はどのように修練を重ねて一人前となるか、あまりなじみがないだろうと思います。医師となるには大学医学部で6年間の教育を受けて、医師国家試験を受験します。この時点では内科、外科のみならず、小児科、眼科、精神科などすべての

分野を勉強していただきますので、各人に専門分野は存在しません。かつては、卒業後すぐに大学の特定の診療科に所属することが多かったため、その時点で「私の専門は〇〇科」ということになり、専門外のトレーニングを受ける機会に恵まれませんでした。その結果、自分の専門分野以外は分からぬ、専門外は診ないという風潮が弊害として指摘されるようになりました。

その流れを改善しようと平成16年に始まったのが、「新医師臨床研修制度」で、今年でちょうど10年が経過しました。基本的な考え方は、「臨床医たるもの、診療科に関わらず誰もが身に付けるべき基本的なものを修得する必要がある」というもので、診療に従事しようとする医師には、2年間の臨床研修が法律上義務づけられました。内容は少しずつ修正が加えられていますが、内科6か月、救急3か月、そして地域医療研修1か月が必修となっており、冒頭に述べた「緊急の場面で最低限の処置を行える」ための経験を得られるようになったことは大きな前進であると思えます。

全国から集まる若手研修医たち

自治医科大学は、ご存じのように全国のへき地医療に従事する医師を

育てる目的で設立された大学であり、卒業後早期に現場で活躍ができるよう、医学生へのベッドサイド実習に力を入れてきました。各診療科とも、地域医療で役立つ知識、技術をできるだけ身につけてもらおうと、忙しい診療を行いながら教育に熱心であるのが当院の伝統だと思います。残念ながら卒業後は出身都道府県に戻るため附属病院には残りませんが、代わって全国の大学を卒業した

多くの研修医が、当院を臨床研修先を選んでくれています。栃木県や近県出身者も多いですが、特に縁もゆかりもなく、北は北海道、南は九州から来てくれている研修医もいます。今年も写真のように55名の輝かしい若手医師を迎えました。十分な研鑽を積んで頂こうと、



全国から集まった若手研修医。研修を積み栃木県内や全国の医療機関で活躍します

指導医として身が引き締まる思いです。当院がこのような若手医師の教育病院であることをご理解頂くとともに、皆様には彼らを下野市民の一員としてご指導くださいますようお願い申し上げます。

最近の臨床トレーニングの特徴には、シミュレーションの活用とガイドラインの整備が挙げられます。採血や点滴、皮膚の縫合など、実際の患者様に行う前にシミュレーターを用いて模擬トレーニングを行うことができます。自治医大には全国有数のシミュレーションセンターがあり活用されています。また、これまで指導医の経験則で決まることが多かった治療方針ですが、最近では患者ごとに標準的な指針を示したガイドラインが整備されてきました。これらを活用することで、一定の診療レベルを習得することができます。

初期臨床研修を終了した研修医は、その後3年間のより高度な臨床修練を行う後期研修へと進み、自分の責任で判断し治療を行える一人前の医師に向かって成長していきます。自治医科大学附属病院が、信頼される医師を育てる教育病院としてさらにレベルアップできるよう努力していく所存ですので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センター長
自治医科大学 内科学講座循環器内科学部門 准教授

新保 昌久
しんぼ まさひさ